

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

ここまで思い出したところでわたしは、これではまるで、陣内君はただの奇人変人の常識知らずでしかないみたいだな、と感じた。もちろん、奇人変人の常識知らずではあるのだけれど、陣内君には別のA側面もある。

①印象的な場面を思い出す。まだ知り合って間もない頃のことだ。わたしたちは駅前のバス停留所で待ち合わせをしていた。永瀬はすでに来ていて、バスを連れたまま、人ごみを避けるようにして立っていた。わたしが近づいていこうとすると、それより前に、背の低い婦人が永瀬のほうへ寄っていくのが見えた。サングラスをかけた永瀬の耳に口を寄せ、婦人は話しかけている。それから、永瀬の手に何かを握らせると、去った。

「今のおばさん、どうしたの」気になったので、そばに寄るとすぐに訊ねた。何があったのか、予想はできていた。

永瀬が小さく笑い、渡された五千円札を、わたしに見せる。②案の定だ。

「また？」

「また、だね」

見知らぬ人間が、哀れな者を見る顔でやってきて、「何も言わずに、これ使って」と永瀬にお金を手渡ししていく。こういうことが、わたしが知り合った後でも何回もあった。

「僕はどこに行っても、募金活動をしているように見えるらしい」

永瀬は慣れていた。子供の頃から目の見えない彼は、それこそ何度となくこういうことに遭遇してきたのだろう。彼自身が苦笑しながら言うように、「③『こういうことのベテラン』だった。」

「彼らは善意の人だからね、B文句を言ったら悪いよ」

「そうだと思う」と言っではみるが、わたしはいつもつらかった。憤慨すべきなのか、悲しがるべきなのか、感謝すべきなのか、判断もつかない。寄こしてきたお金を返すべきなのか、投げつけるべきなのか、受け取るべきなのか。もちろん、お金を手渡してきた婦人は悪人ではないのだろう。街中で、盲導犬を連れて歩いている青年を見かけて、どうにかしてやりたいと思っただけに違いない。バスに乗った永瀬のことをじろじろと眺めて、あからさまに舌打ちをする老人や、ベスの尻尾を踏んでおいて謝りもしないOLに比べれば、まだ害はなかったし、十分にありがたい人たちだった。

けれど、わたしはやっぱり割り切ることができなかった。だから、永瀬が過剰な同情を受けるたびに、^④憂鬱になった。

⑤ その日の場合は少し違った。

陣内君がいたからだ。

ちよつとやってきたばかりの彼は、わたしたちの会話の断片的なところが耳に入ったらしく、「おい、永瀬、その手に持っている五千円、どうしたんだよ」と口を尖らせた。

「どこかのおばさんがくれたんだよ」

「ふざけんなよ」陣内君が声を上げた。

「いいんだ。悪気はないんだよ」婦人を庇う口ぶりだった。てっきりわたしも、陣内君は、「善意を押しつけてきた婦人」に怒っているのだと思った。ところが陣内君は、「よくねえよ」とつつけてから、さらにこう言った。

「何で、おまえだけなんだよ！」

「え」はじめは冗談を言っているのかと思った。

「何でって」永瀬も^⑥口もつた。

「何で、おまえがもらえて、俺がもらえないんだよ」

「たぶん、僕が盲導犬を連れているから、じゃないかな。目も見えないし」

「は？」陣内君が哑然とした顔になった。心底、訝しそだった。「そんなの、関係ねえだろ」

「え」とわたしはもう一度間の抜けた声を出してしまった。

「関係ないっつうの。ずるいじゃねえか」と喚いた。

⑦ わたしは、その時の陣内君が発した、「関係ない」の響きが、とても心地よかったのを今でも憶えている。永瀬も顔をほころばせていた。

「おい、何笑ってるんだよ。自分だけ金を手に入れたからって、いい気になるなよ」

「なってないって」

「俺は納得しないぞ。何で、おまえだけ五千円なんだよ。おかしいだろ？」

「おかしいかもしれない」

「どうして、おまえだけ特別扱いなんだよ」陣内君はそう言うってから、あたりをきよろきよろ見回し、「そのおばさんどこに行ったんだ？」と必死に探しはじめた。

わたしは、彼の真剣な姿がどうにも可笑しくて、唇を噛んで笑いを堪えていた。

しばらくして陣内君は、婦人の姿を追いかけることにも厭きたのか、永瀬の手にある紙幣に目をやって、「いいなあ。おまえはラッキーだったな」と恨めしそうに、呟いた。

「そうだね、たぶん、僕はラッキーだ」

後になって、「あの時の陣内は、本当に、普通だったなあ」と永瀬がしみじみと言ったことがある。わたしも同意見だった。あれほど「普通」に振舞うことなんて、普通はできない。陣内君が、「関係ない」と言った時、わたしの身体の周囲を覆っている暗く黒々とした悩みが、吹き飛んだ。

「うまく言えないけどさ、陣内君って凄（すご）いよね」

「陣内は世の中の面倒なことを飛び越しちゃっているのかもしれない」

「誰も許可してないのに、勝手に、飛び越しちゃったって感じだよな」

それと関係するのかどうか分からないが、永瀬は、陣内君が家裁調査官になることを楽しみにしていた。「きっと、陣内みたいな人は子供たちを救うんじゃないかな」

ただ、わたしは正直なところ、陣内君がまともに働けるかどうか、それすらも疑問視していた。「だってさ、前に、バイト中に人を殴（なぐ）ったことがあったよね」

一年程前に、実際、そういうことがあった。

「あれは驚いたね」永瀬は言いながらも、「でもさ」とつづけた。「でも僕は、ああいうのにも何か理由があったと信じているんだ」

「突然、人を殴（なぐ）るのが？」

「そう」永瀬は優しく微笑（ほほえ）んだ。「僕は、^⑧そう信じているんだ」

わたしは信じていない。

（伊坂幸太郎『チルドレン』より）

問一 —— 線部A「側面」、B「文句」の漢字の読み方をひらがなで答えなさい。

問二 —— 線部①「印象的な場面を思い出す。まだ知り合って間もない頃のことだ」とありますが、ここでの「場面」とはどのような場面を指しますか。最後の六字を抜き出しなさい。（句読点や記号も字数に数えます。）

問三 —— 線部②「案の定だ」、⑥「口ごもった」の意味として最適なものを、それぞれア～エの中から選び、記号で答えなさい。

②案の定だ

ア 意外なことだ イ とんでもないことだ

ウ 驚くべきことだ エ 思った通りのことだ

⑥口ごもった

ア わざと言わなかった イ はっきり言わなかった

ウ いらだった口調で言った エ 無意識に言ってしまった

問四 —— 線部③「こういうことのベテラン」とはどういうことですか。最適なものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア 永瀬は子供の頃から目が見えなかったが、同じ境遇の人のためにお金を集める活動に長い間取り組んできたということ。

イ 永瀬は子供の頃から目が見えなかったので、紙幣の金額を見なくても判別できるようになっていたということ。

ウ 子供の頃から目が見えない永瀬は、そのことを気の毒に思った見知らぬ人からお金をもらおうという経験を何度もしてきたということ。

エ 子供の頃から目が見えない永瀬にとって、駅前で待ち合わせをすることは難しいことではないということ。

問五 — 線部④「憂鬱になった」について。

- 1 この「憂鬱」とほぼ同じ「わたし」の心情を表した部分を、本文中から二十四字で抜き出し、その最初と最後の四字を書きなさい。(句読点や記号も字数に数えます。)
- 2 「わたし」が「憂鬱になった」のはなぜですか。「過剰な同情」「善意」の二つの言葉を必ず用い、三十五字以内で説明しなさい。(句読点や記号も字数に数えます。)

問六 ⑤ に入ることばとして最適なものを、次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア ところが イ だから ウ つまり エ ところで

問七 — 線部⑦「わたしは、その時の陣内君が発した、『関係ない』の響きが、とても心地よかったのを今でも憶えている」とありますが、このときの「わたし」の心情の説明として最適なものを、次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

- ア 陣内が目が見えない永瀬の気持ちを理解することなく、うらやましがるのを見て心底あきれてしまった。
- イ 陣内が永瀬にお金を押しつけた女性に対して怒っているのを見て、自分自身が感じていた怒りが少し紛^{きざ}れるように感じた。
- ウ 陣内が目が見えない永瀬を特別扱いせずあまりにも普通に振る舞うのを見て、それまでの憂鬱が晴れるように感じた。
- エ 陣内が永瀬に同情してわざと普通なふりをしているのを見て彼の永瀬への友情を感じ、温かい気持ちになった。

問八 — 線部⑧「そう」が指す内容を、二十五字以内で説明しなさい。(句読点や記号も字数に数えます。)

問九 本文の内容に合うものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 永瀬は「わたし」をバス停で待つ間に老人から差別的な扱いを受けた。
- イ 陣内は最終的には永瀬が見知らぬ女性から五千円をもらったことに納得した。
- ウ 永瀬は将来陣内が家裁調査官として子供を救うことを楽しみにしている。
- エ 「わたし」は普段から陣内の常識知らずな行動を不愉快に思っていた。

次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

「無から有は生じない」

これは、自然界の根本法則で、例外はない。

ミクロコスモス（エコスフェア・生命地球儀）の実験というのがある。

水と空気、それに砂や小石などを入れたガラスの容器に、小魚と水草とバクテリアを入れて密封してしまい、外部から完全に遮断する。外から入るのは、ガラス越しに入る光と熱だけという状態にするのだ。すると、光と熱のエネルギーによって水草は※炭酸同化を始めて酸素を発生し、魚はその水草を食べて生き続け、排泄する。その排泄物はバクテリアの栄養になり、バクテリアによって分解されて水草の栄養になる。

それぞれの量的バランスが適正に保たれば魚は繁殖するが、増え過ぎてエサや酸素が不足すれば、弱い個体が死ぬ。死骸はバクテリアが分解して、小さな世界のバランスを回復する。

注意深く管理するなら、このミクロの生態系、小さな世界ミクロコスモスは①恐ろしいほどきわどい釣合いの上に立って生命のいとなみを続けて行くことができる。

密閉された世界、ミクロコスモスを見てみると②生物たちはまるで自分たちの力だけで生きているようだ。しかし、ここでも、けつして無から有が生じているわけではない。生命現象をささえているのは外から光と熱の形で供給され続けているエネルギーにほかならない。③暗闇にしておけば、遠からず水草は枯れ、魚もバクテリアも死滅する。

ミクロコスモスの実験を見た人は、いったい何という危なっかしい世界だろうと思う。まるで、一筋の細い糸で絶壁の上からつるされているような生活ではないか。

だが、よく考えると、われわれの住んでいるこの地球上の世界も、基本原理はまったく同じで、大変危なっかしいことに変わりはない。ただ、机の上に置くことのできるガラス容器よりもサイズが大きくて、生きている生物の種類が多いため、危なっかしさが見えにくいだけなのだ。といっても、細い糸が、いくらか太いロープに代っただけであって、本質的には同じことをしているのである。

地球上の環境は充分に容積が大きいから、人間ごときが何をしようとびくともするはずがないというのが、長い間の常識だった。また、あらゆる問題は、いずれは科学技術つまり自然科学を応用した技術の力によって解決できるだろうと、無邪気に信仰している人が圧倒的に多かった。いや、今でもまだ大多数の人はそう信じているのかもしれない。

だが、最近では、無限に近いほど巨大だったはずの地球は意外に狭く、無限の④力があると信じられていた地球上の環境も予想以上に繊細で、ひとたび大きく傷つけば容易に回復しないことがわかってきた。

われわれも、ミクロコスモスに生きているのだ。

A万能のはずだった科学技術も、規模が大きくなるにつれて、いろいろな問題が解決できる一方で、新しい問題やトラブルを生み出す発生源になっている。しかも、科学技術の生み出した新しいトラブルは、もともと自然界にあった問題よりはるかにたちが悪いのだ。今では、中途はんばに発達してしまった科学技術こそが、地球規模での異常を起す元凶になるのではないかと恐れる人が増えている。

科学技術のおかげで、現在のわれわれは、⑤非常に便利な生活をしている。

こういう環境に生まれ育った世代の人には、現在の日本のような生活も特に便利だと思えないのかもしれないが、人類がこれほど便利な生活をするようになったのは、長い歴史のほんの最後の部分にすぎないのだ。

物質文明の最先進国であるアメリカ合衆国の大都会でさえ、蛇口をひねると湯が出たり、外出するのに自動車を使うのが当たり前になってからまだ百年にならない。

しかし、最初に書いたように、けっして無から有は生じない。この便利さも、何もない所から湧いて来ているのではない。われわれは、科学技術を駆使した便利さの代償として膨大なエネルギーを消費し、生活環境を大きく変えつつあるのだ。

高い崖から一本のロープでつるされている人は、自殺が目的でない限り、けっしてそのロープを切ろうとはしない。それどころか、ロープが傷つかないようにできるだけの注意を払うだろう。

ところが、人類は、自分を支えているただ一本のロープをせつせと傷つけているのではないかという不安を感じるような現象が、方々で見られるようになった。

それにもかかわらず、どうすれば良いのか誰にもはっきりわからないのは、現在の社会があまりに複雑になりすぎていて、そのロープが本当に切れかけているのかいないのか、切れかけているとすれば、どこがどの程度切れているのか、誰にもはっきりとは見えないからだ。

それが誰にでも見えるようになるのは、行き詰まってどうにもならない時だけなのかもしれない。

いくらかでもそれに似た状態になったのが、オイルショックの時だった。あの時は、石油の絶対的な供給量が足りなくなったため、現代社会のさまざまな問題点がいやでもはつきりと浮かび上がり、何をどうしなくてはならないかが、誰の目にもぼんやりと見え始めた。ああいう状態では、ロープに傷がついているらしい様子が、ほんの一部分であつてもかすかに見えたので、私たちは、はっきりした目的をもって協力することができた。

幸か不幸か、オイルショックはあの程度でおさまリ、先進国はまた物質的繁栄の道を突き進むようになった。特に日本は、経済的に大成功して、空前の繁栄のただ中にいる。今のこの世の中で、金もうけ以外のことに少しでも心を傾けるように、B 説得するのは、お祭りで浮かれ騒いでいる人に、死後の生活を真剣に考えるようにお説教する以上にもだなことであろう。

本当に⑥ ニッチもサッチも行かなくなるまで、日本人……というより現代の人類が今のような生活態度を変えようとしなないことは、

かなり高い確率で予測できる。

⑦、人間はもともとこれほど目先のことしか考えない動物ではなかった。特に、仏教の影響の強かった日本人は、いわゆる因果報つまり、今やっている行為が近い将来あるいは遠い未来に及ぼす結果について考える習性が深くしみついていた。

江戸時代のことをくわしく調べていると、われわれの先祖は、自分たちがどの程度の強度のあるロープにぶら下がっているのか、はつきり理解して生きていたと思えない部分が多い。

四つの島にたてこもった先祖たちが、二百数十年にわたって日本の自然を喰いつぶすことなく安定した社会を維持し続けたのは、けっしてただの偶然ではあり得ない。⑧ 当時の人はそれなりに、ミクロコスモスの原理をかなりはつきり意識していたことがわかる。けっしてむずかしい原理ではない。たとえば、毎年決まった量の木炭を焼いて町へ売る生活をずっと続けて来た村があったとする。この村の人は、木炭の原料になる雑木林が毎年どれだけ成長するか、はつきり知っているから、その限度を越えて伐採することはない。そんなことをすれば、すぐに原料が枯渇して炭焼きが続けられなくなることが目に見えているからだ。

漁師が魚をとるのでも、同じような判断が働くだろう。自分の村の海や川なら、どの程度の量をとつても減らないかということは、先祖代々のノウハウの蓄積によつてはつきりわかっている。売れるからといって、けっしてむちやくちやにとり尽くしたりはしない。要するに、過去の蓄積を喰いつぶすことをせずに、なるべく最近の太陽エネルギーだけを利用するのが、ミクロコスモスの正しい生活態度なのだ。

江戸時代の人々のこういう生き方を、積極的でないと封建的だとかいつて切り捨てるのは自由である。だが、科学的で合理的だと思つてゐる現代の便利な生活は、無から有が生じないというごく簡単な事実さえ無視した上に成り立っていることも忘れてはならない。

※炭酸同化・・・生物が二酸化炭素を吸収して有機物を作る生理作用。植物が行う光合成もそのひとつで、二酸化炭素を取り込み、酸素を出すこと。

問一——線部A「万能」とB「説得」の漢字の読み方をひらがなで書きなさい。

問二——線部①「恐ろしいほどきわどい釣合いの上に立って生命のいとなみを続けて行く」とありますが、これとほぼ同じ内容をたとえを使って表現した部分を、本文中から二十五字で抜き出さない。(句読点や記号も字数に数えます。)

問三——線部②「生物たち」が指すものを十一字で抜き出さない。(句読点や記号も字数に数えます。)

問四——線部③「暗闇にしておけば、遠からず水草は枯れ、魚もバクテリアも死滅する」とありますが、それはなぜですか。解答欄の形に合うように本文中から九字の言葉を抜き出し、説明を完成させなさい。(句読点や記号も字数に数えます。)

問五——④ に入ることばとして最適なものを、次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア 技術 イ 生活 ウ 復元 エ 労働

問六——線部⑤「非常に便利な生活」とありますが、その具体例として筆者があげているものを、「〴〵の生活」につながる形で、本文中から三十一字で抜き出さない。(句読点や記号も字数に数えます。)

問七——線部⑥「ニッチもサッチも行かなくなる」とほぼ同じ意味の表現を、本文中の〴〵線部ア～エの中から一つ選び、

記号で答えなさい。

問八——⑦ に入ることばとして最適なものを、次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア だが イ つまり ウ では エ だから

問九——線部⑧「当時の人はそれなりに、ミクロコスモスの原理をかなりはつきり意識していた」とありますが、その具体例として筆者が述べている内容を二つ、それぞれ簡潔に答えなさい。

問十 本文の内容に合うものを次のア～カの中から二つ選び、記号で答えなさい。

ア 地球上の環境は充分に容積が大きいから、人間が何をしようとびくともすることがない。

イ 科学技術によって生み出された新しいトラブルは、もともと自然界にあった問題よりはるかにやっかいである。

ウ オイルショックの時は、石油の絶対的な供給量が足りなくなったため、ごく普通の日常生活が全くなかった。

エ 非常に便利な生活をしている現在の人には、江戸時代の人々の生活の不便さは理解できない。

オ 江戸時代の人々は、仏教の教えである因縁果報についてよく考え、自然をおそれ敬う習性を持っていた。

カ 現代の人々は無から有が生じないという事実を忘れ、自然を喰いつぶして便利な生活をしている。

三

次の各問いに答えなさい。

問一 「機」の黒字の部分の書き順は何画目ですか、漢数字で答えなさい。

機

問二 ——線部の敬語の種類が異なるものをア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア ご乗車になってお待ちください。

イ 先生の作品を拝見しました。

ウ 市長に意見を申し上げる。

エ いただいた資料はこちらです。

問三 「予算より多くお金を使ってしまう」という意味の慣用句をア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 足元に火がつく

イ 足がつく

ウ 足が出る

エ 足を引っ張る

問四 ①、②の熟語と同じ成り立ちの熟語をア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

①着脱 ア 創造 イ 無情 ウ 着陸 エ 増減

②地震 ア 帰国 イ 温水 ウ 頭痛 エ 飲食

四

——線部を漢字に直しなさい。送りが必要なものには、送りがないをつけること。

①道路をかくちようする。

②けんぼうを制定する。

③毎日ぜんこうを重ねる。

④花をそなえる。

⑤じゅくれんした職人。

⑥試合にのぞむ。

⑦ちゅうせいをちかう。

⑧まんちようの海。

⑨商品ののうきを守る。

⑩いせきを訪ねる。

〔國語〕

- ⑥
- ⑦
- ⑧
- ⑨
- ⑩